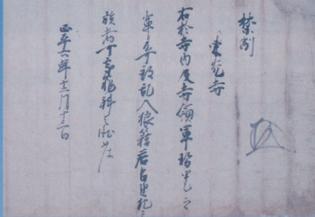


令和2年度 藤枝市郷土博物館企画
 駿河の南北朝動乱展
 - 今川氏、駿河支配のルーツをたどる -

特別展の記録



足利尊氏禁制 正平6年(1351)12月13日付
東光寺所蔵(島田市)



後醍醐天皇繪旨 元弘3年(1333)11月28日付
平田寺所蔵(牧之原市) 静岡県指定文化財



藤枝市
Fujieda City

藤枝市郷土博物館 特別展

駿河の 南北朝動乱展

今川氏、駿河支配のルーツをたどる



足利尊氏像(清見寺所蔵、静岡県指定文化財)
写真提供/吉備文化財修復所

尊氏・直義兄弟が戦った薩埵山合戦の舞台となった薩埵峠(静岡市清水区)より

2020

12/12

2021

1/31

同時開催

志太郡衙跡 国史跡指定40周年記念展
ぐんが発見! 駿河の古代へようこそ

藤枝市郷土博物館・文学館

〒426-0014 静岡県藤枝市若王子500(蓮華寺池公園内) 藤枝市郷土博物館・文学館
 TEL 054-645-1100 FAX 054-644-8514 Eメール muse@city.fujieda.shizuoka.jp
 【後援】静岡新聞社・静岡放送 中日新聞東海本社 NHK静岡放送局 静岡朝日テレビ 静岡第一テレビ テレビ静岡

休館日：月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/28~1/4)
開館時間：9:00~17:00
入館料：大人(一般)400円、(団体20名以上)320円
 中学生以下無料 ※南北朝展と郡衙展共通
 障害者手帳等をご提示の方と必要な介助者は無料

激動の南北朝動乱 天下分け目の決戦の地は駿河!

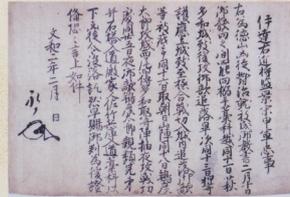
元弘3年(1333)の鎌倉幕府の滅亡により、後醍醐天皇による建武の新政が始まりました。しかし、社会の混乱と武士の不満を背景に、足利尊氏が幕府の再興を決意し、北朝を打ち立て、暦応元年(1338)に征夷大将軍に任じられ、室町幕府を開きました。

ところが、尊氏と弟・直義の間で足利氏内部の対立と抗争が始まり、観応元年(1350)、尊氏派と直義派の両派による武力衝突となり、観応の擾乱と呼ばれる、全国規模の激しい内乱が以後10年近く続きました。この争乱では、尊氏派と直義派、南朝勢力の3者が、離合集散をくり返しながら、三つ巴で激しく争いました。建武の新政から約60年続いた南北朝の動乱は、3代将軍足利義満が明德3年(1392)、南北朝の合一を実現させたことでようやく終わりました。

さて、京と鎌倉を結ぶ東海道が通る駿河国(静岡県中東部)では、尊氏に従った駿河守護の今川範国と範氏父子が一貫して尊氏派として行動し、観応2年(1351)12月、駿河に下った足利尊氏を大将に迎えて行われた直義派との決戦「薩埵山合戦・桜野合戦」(静岡市清水区)に勝利しました。翌年から翌々年にかけて、今川範氏軍が、駿河国内に立て籠もった駿河南朝派や直義派の敵対勢力を撃破して、駿河国内を平定し、名実ともに駿河国の支配者となりました。当市を含む西駿河(志太地域)では、今川範氏軍が藤枝を拠点として大津城攻めや徳山城(川根本町)攻めを行い、敵対勢力との激しい戦闘を勝ち抜きました。

本展では、県内で初めてとなる、駿河の南北朝動乱をテーマとする歴史展です。650年以上前にさかのぼる数々の古文書・彫像・歴史資料や、本展のために新しく制作した合戦ジオラマ・城郭模型など、約40点を展示します。本展を通して、南北朝時代に全国規模の激しい合戦が駿河国内で何度も行われたことや、武功により駿河守護となった今川氏が国内の覇権を確立していく経過について紹介します。

「駿河伊達家文書」6通 原本所蔵/京都大学総合博物館
観応の擾乱で今川方として奮戦した伊達景宗の軍忠状を本物そっくり複製展示



伊達景宗軍忠状 京都大学総合博物館所蔵
駿河国内での合戦の様子が宛明に記述されている。



足利尊氏筆 地藏菩薩像
観応元年(1350)7月6日 清見寺所蔵



今川了俊(貞世)が書いた「薩埵山合戦」
貞享3年(1686)の版本 静岡県立中央図書館所蔵



駿河守護・今川範国書下
観応3年(1352)6月13日付 鉄舟寺所蔵
久能寺に天下安全の祈禱を依頼する内容

「駿河の南北朝動乱」歴史講演会(4回シリーズ)

南北朝期に駿河国内で行われた激しい合戦の様子と山城の特徴や、駿河に據られた足利尊氏の足跡と関連する文化財など、4つのテーマでご講演いただきます。ダイナミックな歴史が展開した南北朝時代の歴史城にふれてみましょう。

■会場…文学館 講座学習室 ■受講料…大人300円・中学生以下100円 ■定員…各回60名(申込順) ■申込み…事前にTEL・FAX・Eメールで(12月1日受付開始)

第1回 今川氏の駿河征圧過程～今川範国の立場～

日時…12/20(日) 14:00～15:30
講師…森田香司氏(静岡県地域史研究会事務局長)

第2回 西駿河における観応の擾乱～伊達景宗軍忠状と山城～

日時…12/26(土) 14:00～15:30
講師…平井 登氏(静岡古城研究会副会長)

第3回 薩埵山合戦の真実～足利尊氏と清見寺～

日時…1/9(土) 14:00～16:00
講師…渡邊康弘氏(地域史研究者、元静岡市文化財課職員)

第4回 仏像の保存と継承～修理から見た清見寺所蔵の足利尊氏像～

日時…1/23(土) 14:00～15:30
講師…牧野隆夫氏(吉備文化財修復所代表)

歴史歌劇「井伊の隠し子」第二幕

昨秋上演して大好評だった「井伊の隠し子」待望の続編、上演決定!
クライマックスは井伊直政と直孝親子の再会シーン

日時…1/10(日) 11:00～12:00 / 14:00～15:00 会場…博物館エントランスホール
出演…「志太の歴史歌劇」創造プロジェクト(主宰/齋藤大輝)
定員…各回、イス席60名・立見20名
料金…大人500円(立見席300円)・中学生以下300円
申込…事前にTEL・FAX・Eメールで申込み。12月10日(木)より受付開始(1回の申込みは4名分まで)。



県内外で活躍中のオペラ歌手が出演

ミュージアムコンサート

■会場…文学館 講座学習室 ■定員…各回60名(申込不要) ■入館者対象(大人は入館料が必要・中学生以下無料)

ヴァイオリンとピアノのクリスマス・デュオ・コンサート

日時…12/13(日)
11:00～ / 14:00～(各回45分)
出演…ヴァイオリン/村松京(藤枝市出身)
ピアノ/岩崎真子(静岡市出身)
曲目…アヴェ・マリア(グノー)
ルーマニア民俗舞曲(バルトーク)
冬の唱歌・クリスマスメドレー 他



新年のはじめの箏コンサート

日時…1/11(日祝)
11:00～ / 14:00～(各回45分)
出演…箏/金子昇馬(藤枝市出身)
フルート/佐藤優佳
曲目…春の海(宮城道雄)
みだれ(八橋検校)
愛の挨拶(エルガー) 他



藤枝市郷土博物館・文学館 TEL 054-645-1100 FAX 054-644-8514 Eメール muse@city.fujieda.shizuoka.jp

例言

1. 本書は、令和2年度に藤枝市郷土博物館・文学館が実施した特別展「駿河の南北朝動乱展」の総括報告書である。
2. 特別展の開催に際しては、資料の公開を快諾していただいた所蔵者や機関のみなさん、写真等の情報の提供・教示をいただいた方々に感謝を申し上げます。
3. 本書では、展示の組立てとその内容と、講演会の概要、および関連事業についてまとめた。
4. 本書は、当初から館のホームページでの公開を目的とし、従って当分の間、閲覧が可能である。

I 特別展の実績

会期：令和2年12月12日～令和3年1月31日 ※開催日数37日

会場：藤枝市郷土博物館・文学館 特別展示室・文学館講座学習室

関連事業：歴史講演会 第1回 12月20日 今川氏の駿河征圧過程 森田香司氏(72名)
第2回 12月26日 西駿河における観応の擾乱 平井登氏(65名)
第3回 1月9日 薩埵山合戦の真実 渡邊康弘氏(59名)
第4回 2月20日 仏像の保存と継承 牧野隆夫氏(43名)

なお第4回は当初1月23日の予定。緊急事態宣言を受けて延期した。(数字)は参加者人数。

特別展入館者数(通算):大人1,690人、小人239名、計1,929人(個人・団体・無料者を含む)

開催期間中の関連イベント：

ヴァイオリンとピアノのクリスマス・デュオ・コンサート 令和2年12月13日
志太の歴史歌劇『井伊の隠し子』 令和3年1月10日
新年のはじめの箏とフルート・コンサート 令和3年1月11日(中止)
室町狂言鑑賞会 令和3年3月28日

II 展示の組立てとその内容

展示構成を考えるに当たり、まず略年表を基礎にして、地域で起こった事柄を整理した。展示の主題である「南北朝の動乱」が経過するなかで、足利尊氏が、駿河の南朝方勢力を駆逐して、幕府の体制を次第に整える一方で、今川氏が駿河進出を果たしたが、この時間を追って起こった事柄がしかも展開した地域を区切ることができて、このまとまりを展示では「コーナー」と呼ぶことにして、動乱全体を理解できるようつとめた。

コーナーAは、「鎌倉幕府滅亡と建武の新政」に関連した事項をまとめて、略年表に続けてコーナー毎の解説を付しておいた。コーナーBでは、「足利尊氏、駿河国内の足跡」と題して清見寺との関わりを、共に南北朝の動乱以前の様子に焦点を当てた。コーナーCを、「今川範国・範氏父子、駿河での権力確立過程」とし、コーナーDは「尊氏・直義の対立と駿河での観応の擾乱」で薩埵山合戦を中心に、コーナーEは、「西駿河における観応の擾乱」、コーナーFは、「幻の大津城はどこか？」で、本展示会の主題「南北朝の動乱」をみる。そしてコーナーGでは「敗れた駿河南朝方の伝承とゆかりの資料」、コーナーHでは、「その後の今川氏と駿河支配」で動乱以降の様子を探ってみた。



展示コーナーG 「足利尊氏、駿河国内の足跡」



展示コーナーF 「幻の大津城はどこか？」

「駿河の南北朝動乱」略年表

和暦	西暦	月日	おもな出来事（※日本史の全体的な事件は太字で記す）
永仁5年	1297		駿河今川氏初代・範国今川基氏の五男として生まれる。（幼名 松丸ノ五郎）
嘉暦3年	1326	3.13	今川範国鎌倉幕府執権・北条高時の出家に合わせ自らも出家し「心省」と名乗る。
元弘3年	1333	5.8	新田義貞鎌倉に攻め入り北条高時自刃す。（鎌倉幕府滅亡）
		8.5	足利高氏後醍醐天皇の実名「宗尊」から「尊」の字を拝領し「尊氏」と改める。
		9.9	今川範国遠江の鴨江寺の用田に立ち働く濫妨人の追い出しを天皇から命じられる。（この頃範国遠江守護に任じられる）
建武2年	1335	7.	北条高時の遺児・時行が鎌倉で挙兵する（中先代の乱）
		8.	足利尊氏遠江や駿河で北条時行軍を撃破し鎌倉を奪還する
		7.12	今川頼国名越太郎邦時を小夜中山に討ち取る
		7.18	今川基氏の長男頼国らが相模川の戦いなどで討ち死
			後醍醐天皇全国に尊氏追討の令を発す。
		12.12	新田義貞箱根・竹の下の戦いで足利尊氏・直義の軍に敗れる。
建武3年	1336	1.	足利尊氏上洛する
		3.	足利尊氏征夷大將軍に補任され室町幕府を開設し建武式目を制定する。
		9.13	遠江国篠原や天竜川で合戦。仁木義高が討ち死にする。
		12.21	後醍醐天皇大和国吉野へ亡命。（南朝発足）
建武4年 (延元2年)	1337	7.6	今川範国井伊城へ攻撃をかける。
		9.26	今川範国足利尊氏から駿河国羽梨（葉梨）荘などを宛がわれる。
暦応元年 (延元3年)	1338	1.28	北畠顕家軍（南朝）西上尊氏の軍と美濃青野原に戦う。北畠軍伊勢方面へ転戦。
		5.	今川範国美濃青野原の功により駿河国守護職に補任され所領駿河国を恩給される。
		5.22	北畠顕家和泉国堺浦の戦いで戦死する。
		閏7.2	新田義貞越前国藤島で戦死する。
暦応2年 (延元4年)	1339	10.28・29	今川範国松井助宗らをひきい駿河国の安倍城に狩野介貞長と興良親王を攻める。
		7.22	今川範国・高師泰・師冬軍は大平城浜名手の2面より井伊軍を攻める。
暦応3年 (興元元年)	1340	10.30	井伊氏の城・千頭峰城落城する。
		1.3	井伊氏の井伊谷城・三岳城足利軍に攻められ落城し、宗良親王大平城に逃れる。
		8.24	仁木義長・今川範氏・斯波義長軍により大平城落城し宗良親王駿河に逃れる。
暦応4年 (興元2年)	1341	9.	宗良親王狩野介貞長を頼り駿河国安倍城へ入る。
			安倍城が征圧される
貞和5年 (正平4年)	1349	閏6.	足利直義執事・高師直の罷免を要求する
観応元年 (正平5年)	1350	10.	足利尊氏直義・直冬と対立。（観応の擾乱）
		12.22	今川範氏「遠州凶徒」を討つため藤枝宿から出発する
		12.24	今川範氏と石塔義房の軍が駿河府中で激突する。
			この頃、今川範氏、葉梨荘（藤枝市）を拠点とする。
		2.26	高師泰、一族とともに直義派の上杉重能によって殺される。
		9.	今川範国、尊氏側につく。
		9.27	伊達景宗、手越河原の戦いで手柄を立てる。
		11.3	尊氏、南朝と和睦し、「正平」の年号を使用する（正平の一統）。
		11.5	尊氏、直義の討伐のため、京を発し、鎌倉に向かう。
		11.16	伊達景宗ら、小川（焼津）から出陣し駿河府中に攻め入る。
		12.11	富士河原・蒲原河原で合戦があり、尊氏派が敵数百人を討ち取る。
12.28	足利尊氏、駿河薩埵山で勝利する（薩埵山合戦）。今川範氏が尊氏側として戦功をあげ、尊氏より感状を与えられる。		
文和元年 (正平7年)	1352	1月	直義、尊氏に降伏する。その後、尊氏とともに鎌倉に入る。
		2.25	今川範氏、足利尊氏によって遠江守護に補任される。
		2.26	足利直義、鎌倉で没する。
		閏2.	正平の一統が解消される。
		8.20	今川軍が直義派の大津城を攻める（9月8日落城）
文和2年 (正平8年)	1353	2.10	今川軍、直義派の残存勢力や南朝派が籠る徳山城への攻撃を開始する。（2月25日落城）
		8.11	今川範氏、足利尊氏によって駿河守護に補任される。

和暦	西暦	月日	おもな出来事（※日本史の全体的な事件は太字で記す）
延文3年 (正平13年)	1358	4.30	足利尊氏、京都で没する。
弘安元年 (正平16年)	1361		今川範国、隠居して家督を貞世にゆずり、長男範氏に駿河国を与える。
貞治2年 (正平18年)			今川範国、幕府引付方の頭人となる。
貞治4年 (正平20年)	1365	4.30	今川範氏没。嫡男氏家（中務大輔）家督を継ぐ。
		10.9	今川氏家、足利義詮によって駿河守護に補任される。
貞治5年 (正平21年)	1366		今川貞世、幕府侍所の長官になる。
応安元年 (正平23年)	1368	2.30	足利義満、征夷大將軍に任じられる。
至徳元年 (元中元年)	1384	5.19	今川範国没。
			遠江守護職は今川貞世が譲られ、ついで貞世、弟の仲秋へ譲る。
明德3年 (元中9年)	1392		3代將軍・足利義満の斡旋で南北朝が合体する
		10.	今川泰範、駿府に入る。
		11.14	今川貞世、遠江・駿河半国の守護となり所領遠江に下る。
応永9年	1402	2.	今川了俊（貞世）「難太平記」を著す。
応永27年	1420	8.	今川了俊、死去。
永享4年	1432	9.17	室町幕府6代將軍・足利義教が富士遊覧のため「藤枝鬼巖寺」に宿泊する。
永享10年	1438		上杉憲実と足利持氏が対立し、「永享の乱」がはじまる。
享徳3年	1454		関東公方・足利成氏が関東管領・上杉憲忠を暗殺し、「享徳の乱」がはじまる。
応仁元年	1467		細川勝元と山名宗全が対立し「応仁・文明の乱」がはじまる
文明8年	1476	4.6	今川義忠、遠江国塩買坂付近で討たれる。応仁・文明の乱に関係する戦いと思われる。
文明9年	1477		大内政弘が降伏し「応仁・文明の乱」が終結する。
文明11年	1480	12.21	龍王丸（足利氏親）、足利義政より家督相続を認められる。

『静岡県史 通史編2』（静岡県 1997年）などをもとに作成

III 展示コーナーの各説

A 鎌倉幕府の滅亡と建武の新政

13世紀後期から14世紀前期にかけて、蒙古襲来（元寇）や頻発する地震などの自然災害により、執権北条氏が専権を振るう鎌倉幕府の権力基盤は揺らいでいた。北条得宗家による専制政治やくり返される権力抗争に嫌気がさし、人々の政治変革への期待が高まるなかで、後醍醐天皇による討幕蜂起がなされた。元弘元年（1331）の蜂起は失敗に終わったものの、同3年、流された隠岐を脱出した後醍醐天皇は、全国各地に幕府討伐の論旨を發した。足利尊氏・直義は、北条氏から派遣された幕府軍として京へ反幕勢力の制圧に向かう途中、三河国矢作宿（愛知県岡崎市）で討幕の論旨を手にし、討幕の決意を固めた。尊氏は、新田義貞密約を結び、足利軍は京の六波羅探題を、新田軍は鎌倉幕府を東西呼応して攻撃することとし、元弘3年5月7日に六波羅探題は陥落し、5月22日には北条一門が東勝寺で自刃し鎌倉幕府が滅亡した。

鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇による親政「建武の新政」が始まったが、政治的混乱のもと武士の不満が高まり、各地で旧北条氏与党の反乱が続いた。最大の事件が、建武2年（1335）7月に起こった前執権北条高時の遺児・北条時行による中先代の乱である。時行軍は、諏訪氏の支持を得て、信濃に挙兵して鎌倉に侵攻し、鎌倉幕府の再建を目指した。鎌倉將軍府の執権となっていた直義は成良親王とともに脱出し、三河矢作宿まで退いた。このとき朝廷の

勅許を得られぬまま京より東下した尊氏が、直義軍と合流し、攻め上る北条時行軍を東海道各所で撃破した。「足利宰相関東下向宿次・合戦次第」（国立国会図書館所蔵）によれば、県内の東海道上で、8月9日遠江橋本合戦（湖西市）、12日小夜中山合戦（掛川市）、14日駿河国府合戦（静岡市）と連日合戦があり、箱根や相模川での合戦を経て、足利軍は8月19日に鎌倉を奪還している。なお、尊氏は8月13日に藤枝に逗留している。

その後、尊氏は鎌倉に居座り、建武政権からの帰京命令に従わなかったため、建武政権からの離反が決定的となった。後醍醐天皇は、尊氏討伐のため、建武2年11月、ライバルの新田義貞軍を東下させた。12月5日、義貞軍と迎え撃つ足利直義軍が手越河原で合戦となったが、直義軍が敗退した。これに危機感を覚えた尊氏は、重い腰を上げて出陣し、12月11日の箱根・竹之下の戦いで新田軍に勝利し、そのまま新田軍を追って京へ入った。

その後、建武5年（1338）正月、奥州から陸奥守・鎮守府將軍きたばはけあきいえの北畠顯家の大軍が、県内の東海道を通過したとき、駿河守護石塔氏いしどう・遠江守護今川範国は大軍の通過を見過ごすだけであったが、その後を追走し、範国は美濃国のりくに青野ヶ原あおのがはらの戦いで後詰の戦功をあげて、駿河国と数十カ所の所領を与えられたことが、子息・今川了俊いまがわりようしゆん著『難太平記』なんたいへいきにみえる。

B 足利尊氏、駿河国内の足跡～尊氏と清見寺～

主峰浜石岳（707m）を中心とした薩埵山塊の周囲には、河川が巡り、その谷には南北を結ぶ中世の道路が設けられていた。東海道は、海岸の「親知らず子知らず」と呼ばれた難所を通り、浜石道、立花道、桜野道などの山道が盛んに使われていた。

清見寺は、東海道の要衝「清見が関」に建つ臨済寺院である。中世には、五山十刹の一つに数えられ、輪番で住職に就いた。尚、康永元年／興国3年（1342）には十刹となっている。そして清見寺には、足利尊氏・直義によって駿河国利生塔が建てられた。幕末に杉谷行直が模写した伝雪舟筆「富士三保清見寺図」（16世紀中頃）が伝わり、そこには清見寺の利生塔が描かれている。また、直接尊氏とつながる資料には、足利尊氏坐像（静岡県指定）や観応元年（1350）7月6日の紀年銘をもつ足利尊氏自画自賛の地蔵菩薩像がある。自画自賛の地蔵菩薩像は、鎌倉市浄妙寺や栃木県立博物館所蔵の作品が知られているが、像容・構成が類似し、紀年も近接する。さらに清見寺では、尊氏との関係を「尊氏公信玄公由緒書」に遺した。

清見寺の西隣の臨済宗瑞雲院も、今川範国の兄大喜法忻（仏満禅師）を開山、足利尊氏を開基とする尊氏と関わりの深い寺院である。

無窓疎石の勧めで、それまでの戦死者を弔うために全国六十六ヶ国二島に「安国寺」を選定し、「利生塔」を建立した。いわば聖武天皇の「国分寺・国分尼寺の詔」に似た仏の力で国を鎮めようとする考え（鎮護国家論）で、同時に後醍醐天皇を意識したものであった。駿河国では、興津川左岸の臨済宗承元寺が安国寺に選ばれた。寺は、承元年間（1219～1222）に創建されたとされ、ここも東海道の間道である峠道「立花道」の交通の要衝に位置している。

後年、尊氏が「観応の擾乱」で薩埵山に籠城したのも、こうした強固な関係を築いてきた寺院の支えがあったからであろう。

C 今川範国・範氏父子、駿河での権力確立過程～今川家古文章写より～

足利一族で三河国今川荘（愛知県西尾市）より発祥した今川氏は、初代範国と2代範氏の代に足利尊氏に仕えて、重要な合戦で戦功を立てて信任厚く、駿河守護や遠江守護に任じられることで、駿河や遠江の支配権や国内武士の軍事指揮権などを手に入れた。広島大学日本史学研究室が所蔵する「今川家古文章写」は、駿河今川氏の当主が足利將軍家より発給された御教書・御内書などの写しで、合計31通が収録されている。足利尊氏から発給された文書が13通と最も多く、駿河・遠江国内の所領宛行に関する文書や、駿河守護・遠江守護に補任する將軍御教書などから成り、原本は駿河今川氏に相伝した重要な文書群だったと考えられる。

初代範国(1295-1384)は、建武4年(1337)9月に尊氏より勲功の賞として、駿河国羽梨荘(現在の藤枝市葉梨地区)や、遠江国河会郷(袋井市)・八河郷(森町)を与えられている。羽梨荘(葉梨荘)は今川氏が駿河国内で得た初めての所領として重要である。

範国は、建武5年(1338)正月、奥州から京を目指して進軍する北畠顕家の大軍との青野ヶ原の戦いでは、遠江守護の今川範氏は顕家軍の後を追送し、後詰め戦功を挙げたことで、子息の今川了俊が書いた『難太平記』に「駿国並数十ヶ所の所領は此後詰の時の恩賞也」とあるように、このとき駿河守護に任じられたと考えられてきた。

2代範氏(1316-1365)は、駿河における観応の擾乱で、尊氏派として奮戦し、目覚ましい戦功を挙げたことで、尊氏より、遠江守護や駿河守護に任じられている。1351年12月27日の直義派との薩埵山合戦では、桜野を守備した今川範氏らの部隊が敵の児玉党などを高所から石弓や石落として攻撃して大損害を与え、合戦勝利の要因をつくった。今川家古文章写には合戦翌日、尊氏が自筆で「昨日の合戦の忠節はことに一人当千とおほえ」と激賞している。これで尊氏の評価を得て、翌1352年2月に、範氏は尊氏より、遠江守護職を補任され、遠江国内の關所地の宛行権を与えられた。

範氏は、1352年8月から翌53年2月にかけて、西駿河に立て籠もる反今川の南朝方及び直義派勢力の掃討作戦を行い、伊達景宗隊の奮戦もあり、敵対勢力を駆逐し、駿河国を平定した。1353年8月、尊氏が父の範国に代えて、範氏に駿河守護職・国務職を与えたのは、範氏の南朝方・直義派征討の恩賞としての意味合いがある。

今川家古文章写によれば、至徳2年(1365)、足利義満が泰範に「駿河国大津庄・徳山郷・安部山・安東庄等」の支配を相伝に任せて認めている。これらの荘園は、大津城のあった大津庄、土岐氏の本拠・徳山城、狩野氏の勢力圏・安部山というように、もとは駿河南朝方の領地であり、駿河での観応の擾乱によって、範氏が征圧し、奪い取った所領である。これが駿河守護今川氏の相伝所領となっており、今川氏が勝利によって得た所領が重要な家領となり、守護の権力基盤となっていたことがうかがえる。今川家古文章写からは、今川氏が足利尊氏の覇権獲得のための合戦に貢献したことで、守護職と所領獲得の両面で権力基盤を築き、名実ともに駿河一国の支配者になった軌跡を追うことができる。

D 尊氏・直義の対立と駿河での観応の擾乱～薩埵山合戦を中心に

観応2年／正平6年(1351)の八月になると兄・尊氏と弟・直義の不仲が決定的になり、直義は北陸道を経由して鎌倉に向かい、尊氏は、一時南朝に下り(正平一統)、直義追討の綸旨を受け、10月14日に東海道から鎌倉に向かった。「伊達景宗軍忠状」によれば、尊氏

は12月13日に薩埵山に着陣し、桜野に陣を移した。

薩埵山に着陣する以前に、駿河国では9月27日の手越原合戦（静岡市駿河区）で尊氏側の今川範氏と直義派が戦っていた。11月21日に同じ場所で、尊氏方の伊達景宗らが焼津から日本坂を越えて、府中の直義派中賀野掃部助・入江駿州と戦って、久能寺に追いやった。また既に11月25日に佐田山で合戦（駿河伊達系図）、12月11日には範氏軍と上杉憲顕ら直義派が富士川原と蒲原河原で合戦した。この時直義は三島に控えている。一方、尊氏は11月26日に掛川に到着、12月3日には吉津寺（焼津市）に戦勝祈願を命じており、日坂を越えて府中に入った。焼津から薩埵山まで10日を要しており、在地の抵抗勢力が進軍を阻んでいたようである。また、宇都宮氏綱ら援軍が薩埵山に迫ってきていた。

尊氏の薩埵山着陣の時、北方の内房（富士宮市）は石堂氏・児玉党が固め、由比。蒲原を上杉氏が固めていた。膠着状態が続く中、12月27日になって、石堂氏・児玉党が内房から桜野道を通して桜野の尊氏の陣に攻め上り、今川範国らは急斜面を使った石弓攻撃で勝利する。同時に内房の北尾崎など薩埵山の周辺でも合戦となり、一気に尊氏側の勝利を決定づけ、29日には合戦は終息している。その後直義は尊氏の降人となり、鎌倉で亡くなる。

尊氏が薩埵山に布陣する選択を決定づけたのは、第一に補給路が確保できたことである。山塊の南は断崖の下を東海道が通るが、由比で塞がれ、東の蒲原と北の内房と北松野も塞がれていた。しかし西は尊氏と関係の深い承元寺（駿河国安国寺）などの寺院があり、山頂の尊氏陣まで峠道を使った物資の補給が可能であった。永禄3年（1560）の「駿河国臨濟寺塔頭・末寺帳」（臨濟寺所蔵）で少林寺をみると、薩埵山合戦の時に、尊氏が「勝」の字を峠道の西側に位置する少林寺に与えている。これは峠道が補給路として機能し、少林寺の補給基地としての役割を評価したからであろう。建武5年正月28日の美濃青野ヶ原の戦いの恩賞により、遠江守護に加えて駿河守護となった今川範国は、観応の擾乱以降、駿河国内の支配機構を整備した。

まず、薩埵山に関所が置かれたことが、後代の文書で確認できる。天文3年（1534）7月13日付け「今川氏輝判物写」（諸家文書纂所収興津文書）で、今川氏輝は今川家臣興津正信に対して、駿河・遠江両国の当知行分を安堵しているが、「駿遠両国当知行分之事」として「一興津郷内堀内分 并薩埵山警護関」とみえていて、観応の擾乱以降の主要交通路に置かれた関のひとつであると思われる、薩埵山の警護の関を今川氏被官の興津氏が管理していた。この関は東海道の間道である立花道の立田峠に置かれたのであろう。

今川氏は交通の要衝に城館を置き街道を守護した。今川期館跡は、凸型の平面形をもち、それ以前の方形館跡との相違を明瞭に区別できる。薩埵山塊の周囲を巡る街道の要衝には、複数の道路が集合していた。そこに人々が集住し、有力な武士は交通の要衝を押さえるために居館を構えた。富士川右岸の北松野には、荻氏館跡（富士市北松野）、内房には同じく荻氏の内房館跡（富士宮市内房）および由比川沿いに由比氏の川入城（静岡市清水区由比阿僧）が今川期館跡として認められる。北松野と内房は甲斐国に対する国境の防衛線であった。これに対し、川入城は由比川筋の街道を見下ろす高台にあり、かつては尾根筋を切断した堀切が一条認められていた。館跡は、長さ一四〇メートル程で、凸部を西に向けた凸形区画の今川期の館跡であり、現在でも北側の一角には土塁が残存している。また、館跡の西側に一段高く方形の曲輪と土橋を介して高山に連絡しており、そこが城の後詰であろう。川入城はそれ以前の館跡を継続していない。新たに今川氏の駿河支配を進めるために、由比氏によって

築かれた館跡であろう。そして東海道の間道である立花道の由比側の登り口（西山寺）に近いことも考慮されて、この場所が選ばれたと思われる。

E 西駿河での観応の擾乱

正平6年／観応2年（1351）12月27日に行われた、尊氏派と直義派による天下分け目の決戦「薩埵山合戦」では、尊氏が勝利を収めた。この合戦における今川範氏の働きは目覚ましく、翌日に尊氏が自筆で認めた範氏宛ての御内書写（今川家古文章写）には「昨日の合戦の忠せち（忠節）、ことに一人当千とおほえ候て、めてたくかんし入候」と激賞している。この合戦により敵の大將である直義は降伏し、翌2月26日に鎌倉で死去した。死因は黄疸症状による肝臓の病とも、毒殺ともいわれる。合戦前までは関東・北陸の大軍を集めた直義軍が優勢だったが、敗退により直義軍は駿河から撤退し、関東や信濃へと兵を引いた。

このため、駿河国内の直義派及び南朝勢力が取り残された形となり、今川範氏による掃討作戦が準備される。薩埵山合戦の翌月には、範氏は久能寺と浅間神社に天下泰平の祈祷を命じ、久能寺には軍勢の乱入狼藉を禁じる禁制が下される。前年11月に直義派が籠もった久能寺城を今川方が掌握したことを示す。その後、6月には範氏父の今川範国が久能寺に、天下安全の祈祷及び「遠江国凶徒対治（退治）」の祈祷として、千手陀羅尼經17日間の勤行を依頼し、その巻数（目録）が届いたことを知らせる書下が現存している（久能寺文書、鉄舟寺所蔵）。このように、西駿河の志太地域や、大井川・藁科川上流の山間部に勢力を保つ土岐一族や直義党に対する討伐の準備が整えられていた。

観応3年（1352）7月21日、範氏は東光寺に禁制を出し、南朝方・直義派の拠点となっている大津城攻めに取掛かる。「駿河伊達家文書」によれば、今川範氏軍は志太地域の天津荘エリアにある大津城攻めに、8月20日に発向して、伊達景宗隊が連日合戦して、9月8日に城を攻略し、直義派の大名・石塔義房の家人・佐竹兵庫入道や藁科氏らを没落させている。

その半年後の文和2年（1353）2月、今川軍は、ついに川根地方に根を張った南朝方の土岐氏の本城・徳山城攻めを開始する。伊達景宗軍忠状によれば、景宗隊は、藁科越えをして、徳山城の支城である萩多和城（静岡市葵区日向）や護応土城（川根本町藤川）を攻めて、攻略する。護応土城では城内に斬り込んだ景宗自身が負傷しながらも、終日の激しい合戦の末、落城させた。その後、朝日山陣・四伝多和砦の徳山城付属の城砦を奪取して包圍網を締め、これを足掛かりに徳山本城に夜攻めなどの激しい攻撃を加え、約10日間の攻防の末、土岐一族や石塔氏家人・佐竹兵庫入道、藁科氏などを没落させ、徳山城を攻略した。これによって、駿河国内の南朝方・直義派の組織的な抵抗は終了し、今川氏は駿河国内の敵対勢力を下し、駿河一国を平定した。

F 幻の大津城はどこか？

今川範氏が20日間の攻防の末、観応3年（1352）9月に攻略した大津城の比定地については諸説ある。「伊達景宗軍忠状」にみえる大津城の名称から、中世の大津荘内にあったであろうことや、伊達景宗隊を中心とする今川軍の攻撃に20日間持ちこたえて籠城できるほどの城の縄張りや堅牢さを備えていることが条件となる。かつて大津城の候補地として、①

島田市落合にある智徳寺裏の高さ 20 m の小山で「すもう段」と呼ばれている所や、②島田市大草にある慶寿寺（今川範氏菩提寺）の裏山が挙げられたが、城郭遺構が未確認のため、現在では否定されている。

1978 年、郷土史家の大塚勲氏が、大津城の候補地を野田の城山とする説を『地方史研究大井川』第 2 号に発表した。旧大津村に属した島田市野田にあることから、中世の大津荘エリアに該当する。城郭遺構は、標高 153 m（比高 95 m）の城山の頂上に、一定面積をもつ本曲輪や腰曲輪が認められ、兵士たちの収容スペースを確保できる。また、尾根を断ち切る堀切も 3、4 か所に存在する。しかし、堀切の規模が大きいことや、『駿河志料』等に「永禄年中、甲州の功臣初鹿野傳右衛門居す」と書かれ、16 世紀後期の戦国時代に武田家臣の初鹿野氏が在城した伝承からすると、南北朝期の遺構ではなく、戦国期の城郭と捉えるべきという見解が出されている。西をにらんだ縄張りから、武田氏による対徳川の運用が有力視されている。ただ、本来、南北朝期に築いた城を戦国期に改修した可能性もあり、さらなる調査が必要である。

これに対して、1992 年、静岡古城研究会会員の水野茂氏と平井登氏の合同調査により、水野氏が同機関誌『古城』第 37 号に「大津城 = 滝沢城説」を発表した。その 2 年前の 1990 年、両氏が滝沢の城山を初めて踏査し、測量や縄張り調査を行った。滝ノ谷不動峽を挟んで東西に並び立つ、標高 380m の城山の山頂に東城と西城の縄張りが確認され、二城一連式の縄張りとなっている。西城は 2 つの曲輪から成り、堀切が 3 条確認され、櫓台跡とおぼしき土壇がある。東城は山頂が自然地形の平坦部であり、堀切が 1 か所確認された程度で規模は小さい。天険に依拠した南北朝期の山城の特徴を残しており、落城伝説も伝わることから、南北朝期の城と結論づけられている。

また、所在する瀬戸ノ谷の滝沢（藤枝市）は、鎌倉時代に伊勢神宮領の大津新御厨であり、南北朝時代には大津新荘稲葉郷に含まれる地だったことから、広義で大津荘内と考えられ、大津城 = 滝沢城であっても問題はない。滝沢城こそ幻の大津城に該当し、土岐氏の本拠「徳山城」の出城という位置づけで、東方 3 km にある今川方の葉梨城と対峙していたという説が平井氏より提唱されている。

このように、現在では大津城の候補地が 2 か所あるが、平成になって発見された滝沢城が南北朝期の城郭遺構の特徴を備え、山間部を介した徳山城との連絡移動という点で有力となっている。

G 敗れた駿河南朝方の伝承とゆかりの資料

駿河国内の南朝や直義派の武将の多くは北朝方の今川氏との戦いに敗れ、所領を追われた。建武 4 年（1337）から足利尊氏より駿河に領地を与えられた今川範国に対し、その対立勢力は南北朝時代以前からの駿河土着の武士が多かった。彼らに関する資料は乏しいが、地域の伝承にはその足跡が残されている。今回展示した 3 点は地域に大切に受け継がれてきた資料であり、伝承とともに南朝・直義派の武将たちの存在を示すものである。

1. 滝沢城の姫宮大明神 たきざわ 藤枝市滝沢には滝沢西・東城の跡地が残されており、一説には観応の擾乱で直義派の諸将が立て籠もった「大津城」だとされている。滝沢西城には、しろかまぶち「城釜淵」と呼ばれる深さ 3 m ほどの滝壺が存在する。滝沢城を根拠地にしていた武将の娘

がこの淵に落ちて亡くなり、それ以来、口の赤い鰻が棲むようになったという伝承が存在し、西城は古くから神聖な場所とされてきた。滝沢の人々は城釜淵を「霊淵」と敬い、干ばつの際には雨ごいのため淵でくみ上げた水を山の頂上で撒きながら踊ったという。

武将の娘が淵に落ちた理由は、皿を洗う際に足を滑らせたとも言われているがくわしくはわからない。南北朝の争乱で滝沢城が落城する際に、娘とその侍者が自害するために入水したという伝承も残っている。

2. 狩野介貞長 狩野介貞長は安倍城（静岡県葵区）を居城とし、南朝方に属した武将である。建武政権下では武者所（京の治安維持・警察機構）にも名を連ね、南朝方に属して戦った。伝承によると、貞長は小瀬戸城（静岡市葵区）を造って後醍醐天皇の皇子迎えたと言われるように南朝方の武将として忠節を尽くしたため「無二の宮方」と言われた。貞長は安倍城とほど近い内牧城も支配していたとされている。内牧城近くの結成寺には貞長の墓と伝わる宝篋印塔が残されている。

3. 田代神楽の殿面 田代神楽は田代大井神社（川根本町）で行われていた祭礼神楽である。神楽の演目は20以上にもなり、その中に「殿面」がある。殿面は鋭い目つきで大きな面であり、演者は武将らしく袴を着用し、太刀と扇子を持ち、太刀を抜いて舞う。殿面は南北朝時代に川根本町一帯を治めた土岐山城守の顔を写したとされており、この地方では山城守は観応の擾乱によって戦死したとされている。殿面の舞は山城守の鎮魂を目的としており、川根本町青部にも同様の神楽が伝わっている。

地元では土岐山城守や土岐氏のことを、親しみを込めて『ときどん』と呼んでいる。また、徳山城の麓には土岐山城守の居館があったとされており、現在は池となっている。この池もまた親しみを込めて『ときどんの池』と呼ばれている。

H その後の今川氏の駿河支配

ここでは駿河今川氏の3代・泰範から6代・義忠に至る歴史の概略を紹介する。3代泰範(1334 - 1409)は、兄・氏家の早世を受けて建長寺の僧より還俗して、応安2年(1369)頃、今川家の家督を継ぎ、駿河守護を務めた。在任中は、嘉慶2年(1388)の足利義満の富士遊覧に際して接待役を務めたと考えられ、また、義満が進めた有力守護大名の討伐にも出兵し、山名氏を討った明德の乱(明德2年・1391)や、大内氏を討った応永の乱(応永6年・1399)のとき、幕府軍の尖兵として活躍した。応永の乱では、泰範は足利義満より「御正筆の御感書」を賜ったという。その恩賞として、翌応永7年に義満より遠江守護職に任じられ、駿河・遠江2か国の守護を兼ねるとともに、駿河国内で所領を与えられた。將軍義満に忠実に従った今川泰範は、応永16年(1409)76歳で没し、藤枝市下之郷にある長慶寺に葬られたといい、長慶寺は泰範の菩提寺となっている(法名「長慶寺殿大山法高大禪定門」)。境内には泰範の五輪塔が建っており、藤枝市文化財に指定されている。

4代・範政(1364 ~ 1433)は、応永16年、泰範の死により家督を相続し、4代將軍義持から6代義教に仕えた。正長2年(1429)に神籤で將軍に選ばれた足利義教は次第に専制的となり諸大名を圧迫したため、鎌倉公方・足利持氏との反目が強まった。駿河を支配する今川氏は、幕府にとって東国に対する藩屏という重要な役割を負っていたので、範政の時代には関東の内紛に対して出兵を余儀なくされた。応永23年(1416)の上杉禅秀の乱のときに

藤枝市郷土博物館特別展「駿河の南北朝動乱展」展示資料一覧

NO	資料名	文書群名	年代	西暦	所蔵先	備考	コーナー
1	後醍醐天皇綸旨	平田寺文書	嘉暦2年9月21日	1327	平田寺	遠江国相良荘(県文)	A
2	後醍醐天皇綸旨	平田寺文書	元弘3年11月28日	1333	平田寺	遠江国平田寺当知行地(県文)	A
3	黄表紙『絵本尊氏勲功記』		寛政12年	1800	当館蔵		A
4	新刻 太平記十卷		元和元年辛酉	1681	当館蔵		A
5	足利尊氏禁制(複製)		元弘3年8月9日	1333	三嶋大社		A
6	足利宰相関東下向宿次・合戦注文(複製)				国立国会図書館		A
7	薩埵山塊の道路(パネル)						B
8	足利尊氏筆 地藏菩薩像		観応元年7月6日	1350	清見寺(静岡市)		B
9	伝・夢窓疎石書「無別」		室町時代		清見寺(静岡市)		B
10	尊氏公信玄公由緒書		文政5年4月	1822	清見寺(静岡市)		B
11	修復前の清見寺足利尊氏坐像(写真パネル)						B
12	木造足利尊氏坐像		室町時代		清見寺(静岡市)	(県文)	B
13	厨子(尊氏像安置)		元禄9年	1696	清見寺(静岡市)	(県文)	B
14	足利尊氏公位牌		江戸時代		清見寺(静岡市)		B
15	雪舟等楊画「富士山図」模写		江戸時代		清見寺(静岡市)	杉谷行直筆	B
16	瑞雲院観応堂の秘仏「如意輪観音」の厨子(写真パネル)						B
17	瑞雲院観音堂の本尊「如意輪観音」(写真パネル)						B
18	円福寺將軍堂の足利尊氏像(写真パネル)				円福寺(静岡市駿河区聖一色)		B
19	厨子の中の尊氏像(写真パネル)				同上		B
20	『今川記』写本				当館蔵		B
21	『今川記』写本				当館蔵		B
22	足利尊氏下文写(写真パネル)	今川家古文印章写	建武4年9月26日	1337	広島大学文学部	静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供	C
23	將軍足利尊氏寄進状(写真パネル)	円覚寺文書	観応2年5月9日	1351	円覚寺	静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供	C
24	駿河守護今川範国寄進状(写真パネル)	円覚寺文書	観応2年3月20日	1351	円覚寺	静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供	C
25	今川範国書状(写真パネル)		応安3年6月1日	1370	円覚寺		C
26	『難太平記』上 写本		貞享3年	1687	静岡県立中央図書館		C
27	『難太平記』下 写本		貞享3年	1687	静岡県立中央図書館		C
28	駿河国国宣	満願寺文書	建武5年6月12日	1338	安養寺(静岡市)	今川範国発給(市文)	C
29	松井助宗宛て今川範国書状		建武5年5月27日	1338	静岡市	駿河国池田郷正税宛行	C
30	新刻 太平記 三〇卷		元和元年辛酉	1681	当館蔵		D
31	駿河国臨濟寺塔頭・末寺帳(少林寺の箇所)(写真パネル)		戦国期		臨濟寺	静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供	D
32	足利尊氏禁制	東光寺文書	正平6年12月13日		東光寺(島田市)	(市文)	D
33	足利直義御教書	旧久能寺文書	観応2年12月18日	1351	鉄舟寺(静岡市)	(市文)	D
34	足利直義御教書(写真パネル)		観応2年2月5日	1351	三嶋大社		D
35	足利尊氏御判御教書(写真パネル)		正平6年11月9日	1351	三嶋大社		D
36	金子信泰軍忠状(複製)		正平7年正月8日	1352	早稲田大学荻野研究室		D
37	今川範氏判物	静岡浅間神社文書	正平7年正月8日	1352	静岡浅間神社(静岡市)		D
38	今川範氏禁制	旧久能寺文書	正平7年正月16日	1352	鉄舟寺(静岡市)	(市文)	D

NO	資料名	文書群名	年代	西暦	所蔵先	備考	コーナ-
39	今川心省範圍書下	旧久能寺文書	観応3年6月13日	1352	鉄舟寺(静岡市)	(市文)	D
40	今川心省範圍書下(巻数返状)	旧久能寺文書	観応3年6月20日	1352	鉄舟寺(静岡市)	(市文)	E
41	伊達景宗の戦歴(パネル)					駿河伊達家文書にみる	E
42	足利尊氏軍勢催促状複製	駿河伊達文書	正平7年閏2月24日	1352	京都大学総合博物館	写真パネル	E
43	伊達景宗軍忠状⑥複製	駿河伊達文書	文和2年10月	1353	京都大学総合博物館	写真パネル	E
44	伊達景宗軍忠状⑤複製	駿河伊達文書	文和2年2月	1353	京都大学総合博物館		E
45	今川範氏感状複製	駿河伊達文書	文和2年2月18日	1353	京都大学総合博物館		E
46	伊達景宗軍忠状④複製	駿河伊達文書	観応3年9月10日	1352	京都大学総合博物館		E
47	伊達景宗軍忠状①複製	駿河伊達文書	観応元年12月	1350	京都大学総合博物館		E
48	伊達景宗軍忠状③複製	駿河伊達文書	正平7年正月	1352	京都大学総合博物館		E
49	伊達景宗軍忠状②複製	駿河伊達文書	正平6年11月	1351	京都大学総合博物館		E
50	薬科方面から望む徳山城の無双連山の山稜(写真パネル)						E
51	大井川河原から望む徳山城の無双連山の山稜(写真パネル)						E
52	萩田和城(写真パネル)					静岡市葵区日向	E
53	護心土城の本丸(写真パネル)					川根本町藤川	E
54	今川範氏禁制	東光寺文書	観応3年7月21日	1352	東光寺(島田市)	(市文)	E
55	遠江国守護今川範国書下	平田寺文書	文和2年3月9日	1353	平田寺	(県文)	E
56	今川範氏書状	満願寺文書	年未詳10月12日		安養寺(静岡市)	満願寺長老宛て(市文)	E
57	大津野田城(写真パネル)					島田市野田の城山	F
58	滝沢西城と東城(写真パネル)					藤枝市滝沢	F
59	城釜淵(写真パネル)					藤枝市滝沢城山	F
60	津野田城再現ジオラマ				当館蔵	岐部博氏制作	F
61	滝沢西・東城再現ジオラマ				当館蔵	岐部博氏制作	F
62	野田城縄張図(パネル)						F
63	滝沢西縄張図(パネル)						F
64	滝沢東縄張図(パネル)						F
65	一石五輪塔2基(写真パネル)					藤枝市上滝沢・平井登氏提供	F
66	若姫宮大明神・姫宮大明神木像と棟札(写真パネル)						G
67	狩野介貞長木像				個人蔵	静岡市文化財資料館受託	G
68	田代大井神社の殿面				神谷家蔵(川根本町)		G
69	田代大井神社の女面				神谷家蔵(川根本町)		G
70	姫宮・若姫宮大明神木像と棟札		嘉永7年	1854		伊豆国仏師作	G
71	紙本著色足利義教像(写真パネル)						H
72	今川泰範五輪塔と雪斎長老無縫塔(写真パネル)					長慶寺境内	H
73	今川泰範寺領安塔判物	満願寺文書	永和4年3月2日	1378	安養寺(静岡市)	(市文)	H
74	今川範政寺領安塔判物	満願寺文書	応永24年7月18日	1417	安養寺(静岡市)	(市文)	H
75	今川義忠像(複製)				正林寺	静岡市歴史文化課	H
76	刀(無銘)		南北朝期		個人蔵	刀工青江	A
77	本展マップジオラマ				当館蔵	小幡耕一氏制作	E
78	仏満禅師坐像(写真パネル)					極楽寺(神奈川県南足柄市)	C
79	駿河国臨濟寺塔頭・末寺帳(写真パネル)		戦国期		臨濟寺	部分	C
80	「花倉城」城郭模型				当館蔵	小幡耕一氏制作	E
81	田代神楽 鬼面・殿面の舞(動画)						H
82	今川氏駿河支配の歩み(パネル)					「今川家古文章」にみる	C
83	今川氏の街道支配(パネル)					館跡にみる	B

(県文)は県指定文化財、(市文)は市指定文化財。

出兵し、乱の鎮定に功を立てた。

永享4年(1432)9月、鎌倉公方・足利持氏を牽制するため、6代将軍義教は富士遊覧と称して、大軍で駿河へ下向した。このとき、義教一行は9月17日に藤枝の鬼岩寺^{きがんじ}に宿泊し、翌日、駿河府中の小野縄手で富士見を楽しんだ。駿河守護の今川範政は駿河で義教一行をもてなし、望嶽亭という建物を建てて接待した。

その後、範政の最晩年、次の家督をめぐり範政の意向や幕府の思惑などが複雑に入り交じって、範政の息子3人が家督を望む状況となり、永享5年(1433)、範政の死によって駿河国内が内乱状態に陥ったが、最終的に嫡子の彦五郎^{のりただ}範忠が家督を継いだ。今川氏5代の範忠(1408-1461)は、関東の兵乱に幕府の命令で出陣し、永享10年(1438)、反幕的な鎌倉公方・足利持氏を追討する永享の乱で戦功をあげ、将軍義教から賞された。同12年の結城合戦や享徳3年(1454)の享徳の乱にも出陣した。

6代義忠(1436-1476)は、父範忠の名代として享徳の乱に出陣し、寛正2年(1461)、家督を相続した。応仁元年(1467)より応仁・文明の乱が起こると、文明5年(1473)、義忠は将軍義政より遠江国懸革荘(掛川市)の代官職に命じられたことを機に、翌6年より今川氏念願の遠江進出をはかる。しかし、東遠の名族である横地氏と勝間田氏を攻めるため遠州に侵攻した義忠は、文明8年(1476)4月、城攻めの帰途、横地・勝間田の残党の攻撃を受け、塩買坂(菊川市)で矢に射られて戦死してしまった。義忠の不慮の死は、駿河・遠江における戦国時代の幕開けともなった。

IV. 講演会の記録

第1回講演会 令和2年12月20日(日)14:00～15:30

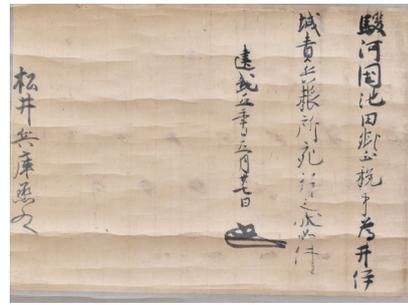
今川氏の駿河制圧過程—今川範国の立場— 静岡県地域史研究会事務局長 森田香司

今川氏の始まり 鎌倉幕府が滅亡の後、今川基氏に四男の仏満と五男の範国があった。現在の愛知県西尾市今川町に今川荘があり、旧矢作川近くの場所が発祥の地である。範国は、「秋鹿文書」中の「今川範国奉免状」(建武元(1334)今川範国、八幡宮領中泉郷を守護不入の地とする)が最初に発給した文書として確認できる。南北朝の初期に尊氏は京から鎌倉までを押さえるために、弟の直義を鎌倉に据え、高氏、今川氏、千葉氏、仁木氏、石塔氏など足利の一族を東海道筋に配置している。

南北朝の動乱 南北朝の対立について年代を追って整理すると、まず建武2年(1335)の北条高時の息子時行が起こした「中先代の乱」では、「小夜の中山合戦」で今川頼国は敵将名越氏を討ち取り、その頼国も頼周共「相模川合戦」で討ち死にしてしまう。その後武蔵小手指原合戦では重病の範満が参戦し討死しており、兄弟では仏満と範国が残った。この「中先代の乱」では、遠江の地域が主戦場となっているが、建武四年(1336)には、範国が遠江国守護と自ら初めて称している。また同年の三方原合戦では、範国方が南朝に勝利したが、例えば、三方原は戦国時代に幾度も戦いが行われたが、それは農民に配慮して原野が戦闘に選ばれたからであろう。さらに、建武4年9月26日に、尊氏から駿河国で初めて羽梨荘(葉梨荘、藤枝市)と遠江国河会・八河両郷(袋井市)が与えられていて、遠江守護今川範国が駿河守護に補任されている史料がみえ、建武5年正月2日になると、葉梨荘を松井兵庫允と

同八郎に支配させている。

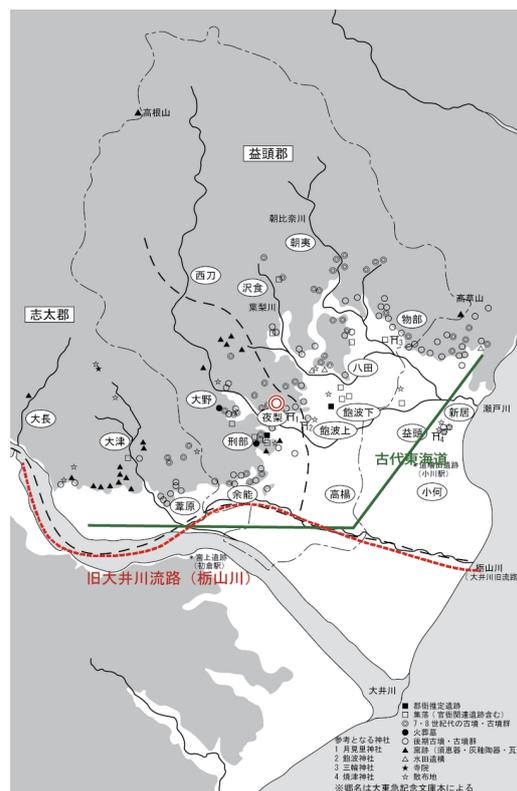
南朝軍の進軍 ここで南朝方の北畠顕家の進軍についてみておこう。建武四年に常陸国^{りょうぜん}靈山城を出立した北畠顕家軍は、西に軍を進め、暦応元年（1337）正月12日には遠江国橋本に到着している。さて、吉野金峯山寺^{きんぶせん}蔵王堂には、天慶七年（944）銘の梵鐘が所蔵されているが、この鐘は掛川市長福寺が所有していたもので、長福寺には「空飛ぶ鐘」の伝説が伝わっている。吉野に向かう顕家軍が、途中長福寺に立ち寄り陣鐘として運んだのであろう。そして暦応元年正月28日に美濃国青野原で北朝方の今川軍と北畠軍が激突した。今川了俊著『難太平記』には合戦時の範国の様子が描かれている。北朝軍の陣では明朝の出陣を前にして、その順を決める籤引きを行ったところ今川軍は二番籤であった。しかし実際には血気の逸（はや）った今川軍が先に戦いを始めてしまった。負けた範国は北朝軍に合流して退くことなく、非人小屋で雨宿りをしていた。味方との合流をためらっている範国に対して、大将の言うことを聞かない家臣は、小屋に火を掛けたので、やむなく範国は小屋を出たとある。以上の2つの出来事から、今川軍には威勢のいい家臣がいたことが知られる。この青野原合戦によって、北畠顕家は京に向かわず、吉野に行くことになった。



駿河国守護今川範国書下

暦応元年の動向 次に今回の展示の目玉ともいえる史料に触れて、この時期の今川範国の動向をみることにする。これは最近静岡市が入手した建武5年（1338）5月27日付「駿河国守護今川範国書下」で、駿河国池田郷の正税を松井兵庫允に与えている。また、遡る3月27日付の「範国書下写」と併せて、駿河国の正税を松井氏に与えたのは、遠江国の戦闘準備のためであったことが分かる。先に述べた青野原合戦の後、北畠顕家は5月に戦死し、後醍醐天皇は、再び9月に宗良親王を遠江に送り、勢力挽回を図ったため、遠江国が南北両勢力の係争地となった。これに対し暦応2年（1338）には北朝軍も三方原から浜名湖北東側に戦場を移し戦った。これまでの今川氏は、「瑠璃山年録殘編裏書」（浜松市北区三ヶ日町大福寺所蔵）に見るように、高師泰・師兼兄弟が北朝軍の中心であり、範国はそれに従う一軍であった。そして南朝の勢力排除とともに範国に権限が移されていった。その後、高兄弟は京都に戻り、尊氏を支えることになり、のちに観応の擾乱に巻き込まれていく。

今川氏の駿河制圧 ところで中世になってから使われる「国宣」という言葉に着目すると、これは知行国司の命令書のこと、翻ればその文書を出した人物が、その国の守護として支配していた手掛かりとなる。それでは、藤枝市葉梨の葉梨荘に注目して今川氏の動向を見ることにしたい。まず、当時の大井川は、現



志太郡・益津郡要図

在よりも北寄りの流路であったが、この場所は駿河国でも遠江国に最も近いところであった。しかも東海道からはやや西側にそれ、谷間に入ったところで、敵に攻め込まれにくい場所であった。現在の地名にも松井屋敷や矢部屋敷に範国家臣の名が残っている。古代には益頭(ましず)郡沢食(さわい)郷に属していたと推定されるが、条里からは外れており、奈良時代に開発された土地ではなく、平安時代以降に葉梨川周辺で乾田として開発された土地であろう。藤枝市の葉梨を拠点に、範国は府中を目指した。

駿河国の支配 「松井助宗軍忠状写」には、暦応元年10月28日に助宗が範国と共に安倍城を攻めたとあり、その後南朝方の宗良親王も暦応3年9月には安倍城に入り、翌年の秋まで留まっていることから、南朝勢力を簡単に押さえ込むことはできなかったようである。しかし建武5年(1338)6月12日付の「駿河国国宣」では、範国が静岡市小坂の満願寺に対し国宣を使用し、同年5月17日付の「駿河守護今川範国願文写」では静岡浅間神社に浅間大菩薩の力の頼った願文を出すことで在地の勢力を取り込んでいる。貞和4年(1348)12月10日付の「足利直義御教書」にみるように、この段階でも安西郷だけが駿河国守護所の北に位置するものの、ほかは全てその南西や南東側にあり、府中を支配したとはいいがたいであろう。それでは範国が駿府に入ったのは何時なのであろうか。ここで観応元年(1350)12月付の「伊達景宗軍忠状」には、22日に南朝勢力と争い、一旦府中に戻るも翌23日には敵対する狩野氏、石塔氏らと藤枝を發して合戦に及おり、狩野氏、藁科氏、入江氏、長田氏、^{とき}鴫氏、中賀野氏などによる今川氏(北朝)包圍網があったのであろう。もう少し年代を追ってみると、観応2年(1351)正月までは直義方についていた範国は、同年8月に尊氏と直義の不仲が決定的となり、これを受けて同年11月の薩埵山合戦では尊氏方についた。これより少し前府中にあった中賀野^{かもんのすけ}掃部助と入江氏を久能寺城に追い払って、府中を制圧できたと考えられる。

結びに代えて 観応の擾乱とは、足利氏執事の高師直・師泰兄弟と尊氏の弟直義の対立から始まった抗争が全国に広がったものそれに南朝勢力が関わってより複雑になった。今川範国は初め直義側だったが、尊氏側に代わって生き残った。今川氏の駿河支配については、不安定要素が多く、特に^{やまひがし}山東と呼ばれる高草山(焼津市・藤枝市)以東にはなかなか勢力は広げられなかった。時には守護所を奪われることもあった。こうした状況を伝えるものが今川氏菩提寺の位置にある。2代範氏の菩提寺が島田市の慶寿寺で、応永16年(1409)に没した3代泰範は藤枝市の長慶寺である。4代範政が今林寺、5代範忠が宝処寺と知られており、この二寺の所在は不明であるが、あるいは氏親の名代になった小鹿範満によって寺が焼かれてしまった可能性があるが、以上の4代範政までなかなか駿府に入ることができなかった事実を示すものではないか。

第2回講演会 令和2年12月20日(日)14:00～15:30

西駿河における観応の擾乱—伊達景宗軍忠状と山城— 静岡古城研究会副会長 平井 登

観応の擾乱とは 元弘3年/正慶2年(1333)の後醍醐天皇による「建武の新政」体制に不満を抱く武士層の足利尊氏が延元元年/建武3年(1336)光明天皇を擁立して京都に北朝を建てると、後醍醐天皇は吉野に移り南朝を建て、半世紀以上続くことになる「南北朝」動乱の時代が始まった。そのただ中の観応年間(1350～1352)、足利尊氏と弟・直義との政

争に南朝勢力が絡んだ三つ巴の戦乱を「観応の擾乱」という。擾乱とは気象用語で、時間と共に刻々と変化する大気の乱れをいい、観応の時期の目まぐるしく変化した体制を指している。また観応の擾乱の構図をみると、新興武士勢力を中心とした急進派が集まった尊氏党と、伝統的な御家人勢力中心の漸進派が結集する直義党の対立に、例えば前者には駿河国守護の今川範国・範氏父子や尊氏御家人の伊達景宗があり、後者には伊豆国守護石塔義房・頼房父子や土豪の佐竹・藁科・中山・土岐（鴫）氏らがあった。さらに西駿河に本領地を持つ朝比奈氏や岡部氏も前者に加わったと考えられる。

これから西駿河地域における観応の擾乱が天険を利用した山岳戦であったことをお話する。山城が全国的に発生したのはこの南北朝期であり、次の「伊達景宗軍忠状」から当時の戦いの様相や山城の果たした役割をみていく。

伊達景宗軍忠状 岡山県の美作に移り住んだ、駿河伊達氏の子孫が所有した「駿河伊達文書」の中に、この観応の擾乱期を伝える一連の「伊達景宗軍忠状」と呼ばれる史料群がある。現在は京都大学が所蔵する。景宗は尊氏と行動を共にしていたが、薩埵山合戦の後に今川範氏の配下となる。正平7年（1352）2月24日付の「足利尊氏御判御教書」で、尊氏は景宗に遠江・駿河の凶徒（直義派のこと）を退治するため範氏に加勢するよう命じている。そこで景宗の軍忠状に記された駿河国での以下の戦歴を通して観応の擾乱についてみる。

観応元年（1350）12月22日、遠州凶徒の進攻を阻止するため、範氏と景宗の軍勢は駿府西方の藤枝に出向くが、翌23日、安倍の御敵（狩野氏や石塔義房家臣の佐竹氏・中山氏ら）が府中に攻め寄せるとの知らせがあったため急遽戻り24日合戦となり撃退する。翌2年9月11日には豆州御敵（上杉能憲）と沼津車返で戦うが能憲に安倍川右岸まで押し返されて手越河原で合戦となった。同年、尊氏派、直義派の両勢力が南朝を支持する正平一統により戦局は複雑化する。景宗は正平6年11月16日に焼津の小川から静岡の小坂・府中に転戦して、長田五郎次郎を生け捕りにし、中賀野・入江らを久能城に追いやっていて、12月12日には、尊氏が景宗に入江荘内三澤小次郎の跡地を与えている。そして同11月25日に薩埵山合戦で上杉能憲と戦い、12月25日には薩埵山の北東部桜野で石塔義房の直義勢と戦った。翌7年2月26日、鎌倉で直義が毒殺されると正平一統は崩壊する。続く観応3年（1352）8月20日から9月8日にかけて大津城を攻め、佐竹氏・藁科氏らと戦い、翌文和2年（1353）2月11日から13日に萩多和城・護応土城で鴫氏らと戦い、同16日から25日に徳山城を陥落させ南朝勢力を一掃することができた。

前述の観応元年12月22・23・24日の範氏・景宗軍の動きは、駿河国における「観応の擾乱」の緒戦を示す史料であるが、範氏・景宗軍が駿河南朝の最大勢力であった安倍の御敵を攻めたことで、石塔の家臣佐竹・中山・藁科らが、西駿河の志太山間地に退散しつつも再集結したため、その拠点とした大津城や徳山城を攻撃することとなった。

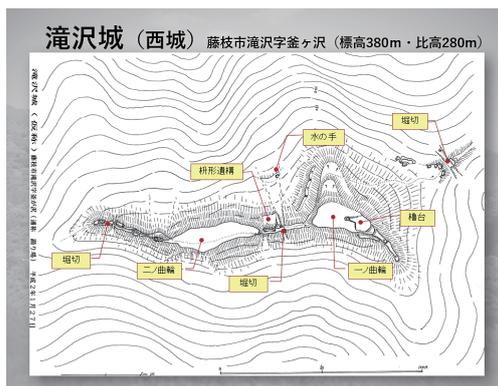
幻の大津城と戦い 大津城の研究史を眺めると、「駿河伊達文書」が知られるようになる以前は、島田の落合や大草あたりに今川氏の拠点があったとする説があった。しかし、駿河伊達文書に記された「大津城責め」により、南朝軍が立て籠った大津城が島田の旧大津村にあったとする研究へと変化し諸説がみられるようになる。とりわけ、大塚勲氏の野田城＝大津城の説が近年有力視されていた。しかし、「大津城責め」の戦闘日数とその前後の府中



での戦い、川根の徳山城の戦いと
の関連性から大塚説の野田城＝大
津城では、地理的あるいは構造的
に解せない点が多いため、志太地
域すべての城郭縄張調査と新たな
山城発見のための悉皆調査を実施
した静岡古城研究会の平井登・水
野茂による滝沢城＝大津城説が最
有力視されるようになる。また、
鳥田の東光寺が所蔵する「東光寺

禁制」も大津城責めと関係した。禁制とは寺社が保護を求めて金品や食料を差し出し、大
将はその寺社に対する兵の乱暴狼藉を禁じた文書を発給すると寺社側はこれを高札にして
掲げた。東光寺に対しては、薩埵山合戦の最中、正平6年12月13日に尊氏が出している
が、これは寺院を味方に取り込むためである。要するに東光寺僧兵は北朝軍に与したので
ある。翌観応3年7月20日付の東光寺禁制は1ヶ月後の8月20日から始まる大津城（滝
沢城）攻撃の大將である範氏が改めて出している。このことは、大津荘の東隣のすでに今
川領であった葉梨荘に軍事拠点（葉梨城・葉梨小城）を整えると同時に、別動隊・景宗軍
の迂回行動、つまり大津城（滝沢城）を西側から攻め込むことを示唆していよう。なぜな
ら、東光寺の北西山中にある千葉山智満寺は『智満寺記録』によると同時期に堂宇が火災
で焼失したと伝えている。それは智満寺が南朝に与したからであり、東光寺僧兵の加担を
得た景宗軍によって焼き討ちされたと考えられるからである。なお、大塚説の野田の城山は、
江戸後期の地誌『駿河記』にいわれるように戦国期の永禄年中に武田氏家臣、初鹿野信昌が、
徳川氏との抗争に備えて大井川渡河地点の防衛・監視のために築いた城であることは、縄
張構造的にも相応しいのである。

滝沢城＝大津城 これから大津城と比定した滝沢城（東城・西城、標高380m）の検討
をする。この城は東西で補完し合いながら幾筋もの中世の街道を押さえている。文献史料
では、『駿河記』に瀬戸ヶ谷の城山と記述がみえ、『瀬戸谷村誌』には龍雲寺の項目に山背
の左右に城があると記されている。地元には「龍雲寺由来」、「城釜淵伝説」、「丸山五輪塔」、
「お妥冢さん」といった滝沢城にまつわる伝説が知られている。そして東城・西城ともに南
北朝期らしい堀切、曲輪などの遺構が良好に残っている。滝沢城（東城・西城）の特徴は、
①天険に依存した要害性すなわち山城発生期の原初的構造、②籠城・のろし・街道監視・
ゲリラ戦に適した占地、③地元に残る徳山城の出城伝説・落城伝説、④今川氏の軍事拠点、



葉梨城・葉梨小城と瀬戸川を挟んで対峙する関係であろう。

次に「伊達景宗軍忠状」から滝沢城が大津城であったことを述べてみたい。観応3年9月10日の軍忠状では、佐竹・藁科らの大津城を8月20日に景宗軍は範氏軍と共同して攻撃を始め、連日合戦して9月8日に没落させたとある。従って「大津城」はどこなのかを考える上で、約20日間の攻撃に耐えうる要害堅固性が必要である。これまで長年かけて志太山間地域の山々を悉皆調査してきたが、川根筋の喉元に「双頭の構え」で屹立する滝沢城を除いて、この20日間の攻防を物語ることのできる山城は無かったのである。大津城の名称は、伊勢神宮領の「大津御厨」「大津新御厨」、それが今川領となる「大津荘」に由来しているが、滝沢城は大津荘のほぼ中央に位置することから、「大津城」としての妥当性は高いといえる。

徳山城攻め これも文和2年2月付の「伊達景宗軍忠状」からみることにする。この軍忠状で、2月10日から同25日までに亘る範氏軍の別働隊・景宗軍の進攻が報告されていた。南北朝期の山城の特徴ともいえるが、この戦いが展開した広域の山岳地帯には徳山城以外の城に明確な城郭遺構は無い。萩多和城や護応土城は地の利を活かし、柵や逆茂



木程度の防備と掘立小屋程度が設けられていたであろう。GIS 赤色立体地図でも人工的な痕跡は認められない。軍忠状には、景宗軍の進攻経路が日付を追い克明に記されている。興味深いのは、徳山城と尾根続きにある自軍が寄せた清水砦のすぐ間近にある本城を攻めるのではなく、わざわざ西側の尾根に迂回し、朝日山砦、塩野砦、梶山砦の陣を設けながら進軍し、一旦、下泉河内川の谷に下り、徳山城にはい上がる所に陣（四伝多和砦等）を構え、そこから徳山城に決戦を仕掛けていることである。その理由は、清水砦から徳山城の本城の間には、200mも続く極めて狭い尾根「犬戻り」という急崖地形が進攻を阻むためであるが、一方で笹間方面から攻め上がる範氏本隊との挟撃作戦上の牽制的、陽動的な動きとも読める。なお、2月13日の護応土城での戦闘は景宗が負傷するほどの激戦だったようで、その軍功に対し5日後の2月18日に範氏は感状を与えている。

この文和2年2月の徳山城の戦いを最後に駿河南朝勢力は掃討された。同年10月、景宗は観応の擾乱における一連の戦功を記した「軍忠状」を差し出すと範氏は花押し上申している。しかし、この恩賞要求状に対して、すでに宛行われている駿河国有度郡入江荘内の所領以外、新たに尊氏から景宗に所領が宛行われた形跡は無い。

第3回講演会 令和3年1月9日（日）14：00～15：30

薩埵山合戦の真実 ～足利尊氏と清見寺～

地域史研究家 渡邊康弘

はじめに薩埵山合戦の簡約しておく。まず①「観応の擾乱」の一齣が「薩埵山合戦」で、②尊氏・直義兄弟の不仲が決定的になり、直義は鎌倉へ移ってから伊豆国府に向かう。観応

2年／正平6年（1351）10月14日には、一方の尊氏は東海道を東へ向かい、両者は薩埵山で衝突する。③尊氏は薩埵山中に籠城し、宇都宮氏ほかの援軍を俟つ。④直義方は東海道を塞ぎ、薩埵山の東側と北側を囲んだ。⑤尊氏が勝利して、翌年の1月5日には兄弟が鎌倉に入り、2月26日に直義が亡くなる。そして⑥この合戦が、足利幕府と今川氏の駿河支配の足固めとなった、そうした合戦であった。

薩埵山の地理的環境 ここでこの地域の地形と当時の交通路を整理しておきたい。この地域は、その周囲を溪谷河川で切り取られたまとまりのある「薩埵山塊」と呼ぶことにした。この山塊の東側は南流する由比川と峠の分水嶺を介して北流する有無瀬川で限られ、この有無瀬川は北松野で富士川に注いでいる。西側は南流する興津川と支流の小河内川および穴原・逢坂から北流する稲瀬川で囲まれ、この稲瀬川は内房で富士川と合流している。そして富士川沿いと山塊周囲の谷あいには、道路が設けられた。また山塊の中央には浜石岳（707m）近くの尾根筋を浜石道と呼ぶ尾根道が通り、駿河の塩や海産物が甲斐に運ばれ、この道に向かって桜野道ほか幾筋もの山道が連絡している。

さて、この時代にも主要な幹線路は東海道であったが、薩埵下の海岸をぬける道は時化や合戦で塞がれることがあり、間道（バイパス）を予め用意しておく必要があった。それは興津川左岸の立花集落から浜石道上の立田峠を通り由比の西山寺にぬける道で、立花道と呼ぶ。この立花道が古代からの道路であったことは、立田峠近くの立花池に山岳密教寺院「立花池廃寺」が営まれていたことから分かり、立花の少林寺には池から出土した観音像などが保存されている。以上の環境を踏まえて、再度薩埵山合戦を整理しておく。



薩埵山塊の道路網

1. 東海道と富士川筋を直義勢が塞いだため、東へ向かう尊氏は、間道の立花道を探る。
2. この道の峠近くには、古代の立花池廃寺が営まれ、道は古代からのバイパスであった。
3. そこで尊氏は薩埵山で籠城して援軍（宇都宮氏綱勢）の到着を俟つことにした。
4. 「野」と名付けられた山中の平坦地（桜野・^{うつき}槍野）を選んで、陣を張った。
5. しかし籠城には補給路の確保が必須であった。

薩埵山合戦とは 薩埵山合戦の経緯をみておく。まず尊氏はいつ薩埵山に着陣したかについては、『太平記』では正平6年（1351）11月29日とするが、正平7年正月8日付「金子孫十郎軍忠状」では12月13日とする。そこで尊氏は掛川に11月26日に到着、12月3日になって焼津の吉津寺に戦勝祈願を命じているので、11月29日の薩埵山への着陣は不可能であろう。また薩埵山周辺では、11月23日に今川範氏が由比山に着陣し、同25日には合戦が始まっている。加えて12月11日には由比・蒲原・内房で戦闘があり、薩埵山塊の東方と北方が直義方に押さえられてしまったので、足止めされ、山中に籠城を余儀なくされたのである。

さらに「金子孫十郎軍忠状」には、12月13日から29日迄薩埵山で警護したとあり、薩埵山合戦は28日には終了していたであろう。特に12月28日に尊氏が範氏に対して自筆感状を与え、「昨日の合戦（27日の桜野合戦）の忠せち一人当千」と範氏の働きを手放しで褒めている。この桜野合戦では、内房に駐屯していた直義方の石塔氏や児玉党が浜石道を登って、尊氏軍の本陣・桜野を攻めるが、急傾斜地形を活かした「石弓」攻撃で討ち、尊氏方を勝利に導いた。以上、薩埵山合戦は11月23日から12月28日迄を指す。

例え1ヶ月であっても山中の籠城には、兵糧等の補給路の確保が必須である。尊氏にとって幸い山塊の西側は閉じられておらず、補給路が存在していた。臨濟寺が所蔵する「駿河国臨濟寺塔頭・末寺帳」は、後年永禄三年頃に書き上げられたと推定されているが、立花の少林寺の項をみると、薩埵山合戦で尊氏が山中に陣を置いた時に、寺に「勝」の字を与えて、寺名を「少林寺」から「勝林寺」としたとある。これは立花道を補給路とし、少林寺がその任に当たったことを褒めて尊氏が与えたのだろう。また、これは文献では確かめられないが、浜石道の起点のある真言宗「東勝院」の「勝」も同様に尊氏が与えたのかも知れない。

薩埵山合戦以前のこと 尊氏は、薩埵山合戦以前に興津の地域と関わりがあった。尊氏・直義は、夢想疎石の意に沿って「安国寺・利生塔」の制を全国に布いた。駿河国では、利生塔を清見寺に建て、承元寺を安国寺とした。延元4年/暦応2年（1339）に後醍醐天皇が死去し、興国6年/貞和元年（1345）に、北朝光厳院の院旨を得て、寺号を安国、塔の名を利生と決めた。「そもそも、安国寺・利生塔は、元弘以来の戦死者の鎮魂と戦災の悪因縁からのがれて天下太平を祈ることを第一義とし創設されたものとされるが、足利尊氏・直義らが、最も恐れたのは、後醍醐天皇が怨霊となることであつたので、それを封じる必要があつた。」と松尾剛次が説明する。恐らく暦応2年（1339）後の近い時期に多くの国で、安国寺・利生塔が選定されたと考えられる。

また、安国寺については、全国一律に施行した制度が大きく年代幅を持っていたとは考えにくく、しかも臨濟寺院を選び、新たに寺院を建てる訳では無く、既存の寺院を指定するのであるから、猶更その施行年代幅はせまいものであつたろう。併せて主要街道に営まれていた寺院を安国寺に指定しており、承元寺も、東海道の間道・立花道に位置する古刹であつたので、戦略的にもその価値が認められて「駿河国安国寺」に指定された。承元寺は、^{だいきほうきん}大喜法忻（範国兄）が開山、今川範国が開基であり、前の補給の役割を担つたと思われる。これに対して、利生塔が設けられた清見寺であるが、伝雪舟作とされる「富士三保清見寺図」には寺の高所に塔が描かれており、16世紀後半まで残っていた可能性がある。また文明17年（1485）9月25日には、万里集九が『梅花無尽蔵』の中で、尊氏像が「壊れた塔に開基の尊氏像を安置してある」と記し、今回展示した「足利尊氏坐像」の製作年を推定する根拠でもあり、利生塔がこの時期まで存続していたとする根拠でもある。このように尊氏は清見寺・安国寺と観応の擾乱が始まる以前から繋がりを持ち、尊氏の籠城を決定する要因の一つに数えられよう。これまでをまとめておく。

1. 薩埵山の東と北を直義方に押さえられた尊氏は、西側に補給路を確保して籠城した。
2. 薩埵山合戦は、観応2年11月23日に、今川範氏軍が由比山越えに着陣したことに始まる。
3. 12月11日には、富士川河原・蒲原で戦闘が始まり、同月13日に尊氏が桜野に布陣した。
4. 尊氏は12月27日の桜野合戦を制し、12月29日には薩埵山合戦が終結した。
5. 尊氏は、日本坂を越えて府中に入り、薩埵山到着までには入江氏などの抵抗があつた。

6. 合戦以前に尊氏と関係があった清見寺・承元寺と少林寺・東勝院も補給路の確保に働いた。

薩埵山合戦のその後 薩埵山合戦が終わり、今川氏が駿河への進出を果たしたが、その支配について交通路と寺院に対する政策をみることにする。

交通路の支配 複数の主要道路が集まる要衝に、館を設けて今川家の家臣をあてた。中世の武士の館は、今川期以前の方形館跡から今川期の凸形館跡の二種類を認めることができる。交通の要衝である内房と北松野には方形と凸形の両館跡見えて、今川期も前代から引きつい支配の拠点を築いているが、由比川に面した阿僧には今川期になって初めて川入城が築かれた。また領域の随所に関が設けられたが、中でも薩埵関は立田峠に設置されたと推定でき、今川氏被官の興津氏が管理を担っている。

寺院政策 中世にあって寺社は地域を代表する大地主であり、為政者は寺に特権を認めることで、その経済力と寺がもっていた広範なネットワークを利用し、何よりも信仰を通じて、住民に対する支配力を強化しようと考えていた。そこで久能寺と範囲の兄、大喜法忻が開山となって開いた寺院をみることにしたい。

1. 観応2年(1351)11月16日に、伊達景宗と戦った中賀野・入江などの直義派が久能寺に逃げている(『駿河伊達文書』)のは、久能寺が直義側に属していたからで、それ故同年12月18日付の「足利直義御教書」で直義は、観応年号を用い戦勝を祈願できたのである。

2. 乱も完全に終結した正平7年(観応3年)正月6日には、今川範氏(上総介)が久能寺に対して「今川範氏書下」を出し、天下泰平の祈祷を行わせており、続く正平7年(1352)正月16日には、範氏が「今川範氏禁制」を出している。文書では、南朝の年号「正平」を用いていて、この時期まで「正平一統」が継続していたことが分かり、同年3月の範囲発給文書では正平から観応へ年号が戻っていて、「正平一統」が解消していた。

3. 多くの場合、寺に対する祈祷の依頼(命令)文書に続き、自分の家臣向けの禁止事項を述べた禁制文書を発給するという二段階のプロセスを経て支配が完結するが、禁制文書から久能寺が今川氏の実質支配下に置かれたことが分かる。

さて、寺を支配下に置くために、今川氏に関わりの深い人物を開山あるいは開基に据えて寺を中興しているが、建長寺や円覚寺の住職を歴任した大喜法忻(仏満禅師)は、今川範囲の兄であり、今川氏の駿河支配を信仰面で支え、弟と共同して臨済宗の寺院を興した。そこで仏満が中興を含め開山した清水地区の臨済寺院をみると、①光明寺(静岡市清水区下清水)、②東海寺(同北矢部)、③高源寺(同高橋)、④善応寺(同蜂ヶ谷)、⑤大福寺(同鳥坂)、⑥瑞雲院(同興津清見寺町・尊氏開山)、⑦永寿寺(廃寺)、と前に触れた⑧承元寺(範囲開基)をあげることができる。こうした臨済宗の教線拡大は、同時に今川氏の実効支配が細部に亘って着実に及んできた証であろう。

第4回講演会 令和3年2月20日(日)14:00~15:30

清見寺所蔵木造足利尊氏像修復から見たこと - 仏像の保存修理と継承

吉備文化財修復所 代表 牧野 隆夫

はじめに

仏像修理をやっている牧野隆夫です。私の仕事内容にご興味のある方は、拙著『仏像再興』(山と溪谷社刊行)をぜひご覧ください。今回展示された静岡県指定文化財である清見寺足利尊氏

像を数年前に修理しました。久しぶりに会場で拝見し、あらためて立派なお像だと感心した次第です。本日はスライドをご覧頂きながら、尊氏像の保存修理が清見寺の他のお像と比較して異なる点、修理を通じて分かったこと、などをお話します。

最後に近年は自分の仕事として修理のみならず、仏像の保存継承について関わるが増えていますので、現在問題になっていることを知って頂きたいと思います。

1. 清見寺と仏殿の諸像

(1)まず清見寺の概要から。静岡市清水区興津清見寺町にある駿河の古刹です。臨済宗妙心寺派巨鼈山（こごうさん）清見興国禅寺と言い、白鳳年間にできた清見関の鎮護として創建されたとされます。総門、山門、大玄関、大方丈、仏殿、書院、鐘楼、潮音閣、宝物館、庭園等があり、東海道の要衝で海にも近く、朝鮮通信使の接待施設でもありました。

(2)仏殿に安置されている主な仏像は以下となります。うち①～④の4体の像を平成18年から31年にかけて修理しました。像名後（ ）は吉備文化財修復所による修理年です。



足利尊氏坐像（清見寺蔵）

①釈迦如来坐像（H20.9.16～22.3.31）。光背修理（H30.6.29～31.3.31）。仏殿の御本尊で、臨済宗に多い阿難、迦葉の両像を従える三尊形式です。像内墨書から、制作が元和三年（1617）十月作で、他に施主や作者が森心橋、森安廣であることが分かります。光背は1920年代末に修理された模様。

②開山像（H20.2.29～20.9.16）関聖明元禅師のお像。衣の垂下部裏の墨書から嘉吉二年（1442）作と分かる。大正六年十一月に修理（椅子裏面に木札）。

③準開山像（H18.12.15～20.2.29）太原崇孚雪斎（1496～1555）のお像。像内背面に墨書あり、天文二十四年（1555）作。大正六年十一月に修理（椅子裏面に木札）。

④中興開山像（H18.3.31～18.12.15）のお像。像内背面墨書から元和三年八月制作と分かる。大正六年十一月修理（椅子裏面に木札）。

仏殿には、⑤達磨大師、⑥賓頭盧尊者坐像その他がある。

(3)次に、一般的な仏像の修理について準開山太原崇孚雪斎像を例に、スライドで説明します。傷みのひどいお像は一般的には完全な解体修理をします。その典型的な例です。

(4)「仏像」という言葉と概念についてですが、単に仏教の信仰対象である仏像にとどまらず、神像、肖像彫刻（武将像、高僧像等）まで含める場合も多く、ここでもその立場をとっています。中でも武将像の発生＝業績ある武人の神格化、は興味深く「死して後も国家安寧を護る」との思想が、武人の像を建立することにつながったように思います。

2. 尊氏像の修理報告

(1)本尊氏像の修理期間は平成28年6月28日～30年3月31日（26日搬入安置）の2カ年間で静岡県の補助事業として実施されました。

(2)修理実現までには20年近い紆余曲折があり、初回調査は平成11年3月14日、その後平成19年、修理計画・見積書を出すもその時は実現せず。平成27年7月24日、静岡市より新たな事業として再度計画策定の求めがあり、同年9月27日、県担当者、県審議委員、市担当者とで再調査、修理方針の最終確定後、10月9日に再度計画書と見積書を提出、28年度からの2ヵ年度事業として決定、実施に至りました。

(3)足利尊氏(1305～1358年)は、晩年20年(1338～1358年)征夷大將軍を務め、戒名は「等持院殿仁山妙義大居士長壽寺殿」。清見寺にある位牌には[表]等寺院殿準三宮一品仁山大居士、[裏]延文三(1358)戊戌四月廿九日と記されています。

(4)制作年については、本像からは墨書が確認できず推定になります。室町時代の禅僧万里集九の記す『梅花無尽蔵』清見寺の項の「尊氏像」記載が本像を示すならば、文明十七年(1485)以前と考えられます。技法構造的な類例で造像年の分かる近隣像としては、熱海市伊豆山神社役行者倚像(文明十五年:1483)、磐田市玄妙寺日蓮聖人坐像(元和九年:1623)などが思い浮かびます。顔面内に「清見」「清」の文字、像底部材(後補、仏像台座などの転用材か)に「大日本國駿州巨龜山清見興國」の文字がありました。

(5)修理前の像の状況としては、環境の良い宝物館内に安置されていたものの、損傷(主として後補の表面塗膜の剥離)がひどく、各地からの展覧会出陳依頼にも対応できず、今回、藤枝での「駿河の南北朝動乱展」が修理後の初公開となりました。

(6)今回修理の方針(他の修理との相違点)としては、近代修理時の不要な塗料を除去し、その下の古い時代の表面塗膜の保護のため、解体を最小必要限度にとどめ、材を傷めている鉄釘を除去し、そのまま構造的な補強を行うという特殊な修理方法を取りました。

(7)今回分かったこととして、過去2度の修理痕跡があり、大掛かりな修理1は、像底の転用材・右袖先を補い、表面を布貼りした時で、後述の厨子と台座が造られた元禄期と思われます。その後の修理2は、玉眼の描き直しや表面のお化粧(彩色)直し主体で、使用されている塗材から、前述した仏殿の諸尊像修理と同時期(大正六年頃)でしょう。

(8)特筆したいのは、本像のために江戸期に造られた厨子のことです。これは寄棟の春日型厨子で、木造、透き漆塗りで、隅金具、飾り金具等は鉄製、構造的には極めて丁寧に作られています。いかにも武人を祀るために作られた、質実な印象を与える厨子です。背面には「元禄六年(1693)／等持院殿木造厨子／仲夏(陰暦5月)十五造立／大工良祐禅匠上坐」の墨書があり、制作時代や制作目的が明確に分かり、当時の技法や厨子の制作技術を知る、木工史上極めて貴重なものといえます。先に述べた大掛かりな像の修理1は、この時に行われたと考えられます。

(9)次に他寺院等にある尊氏像、絵像と比較しての特色です。現在、国東市安国寺にあり、京都東岩蔵寺旧蔵で明治40年山科地蔵寺から移された像が最古の尊氏像です。この像は尊氏存命中の院派仏師作とされ、京都等寺院の像と共に目尻がやや下がっています。この両像のふっくらとした面立ちは清見寺像と共通しており、尊氏の鷹揚な人柄を表しているように見えます。

清見寺足利尊氏像は、今回お披露目の機会を得、今後各地から展示公開の要請が増え、貴重な宗教的文化財、歴史資料としてそれに対応することになるでしょう。

現代で活用し未来に継承する、そのために行うべき文化財保存修理の意義が明確に分かる良い事例であると言えます。

3. 仏像の保存修理と継承について

最後に今、私が関わっている幾つかの文化財保存の案件についてお話しして終わりにしたいと思います。

(1)まず、仏像というものの置かれている現状についてです。我が国には数百万体を超える木彫仏が存在し、歴史と文化を伝えるよりどころとなっています。仏像が歴史遺物として地域に伝承されている最も古いものである場合も少なくありません。

明治新政府の神仏分離政策により、寺院は多数が消滅衰退し、流出した仏像の管理は多様化され現在に至っており、そのことが保存継承の複雑化を招いております。

以前から言われてきた、過疎化による地方の寺院維持の問題、信仰の変化による寺離れに加え、特に寺院以外の「地域（地区）で管理されている像」の保存継承の問題、新住民の流入による相対的な関心の低下、管理者の固定化による継承の途絶、などの解決が大きな課題となっており、近年は背景に世界の変革期＝グローバリズム拡大による固有文化消滅の危機＝への対応という意味合いも含まれます。

(2)現在私が関わっている二つの地域で行われている保存活動の実例をお話しします。

[静岡県葵区建穂観音堂諸尊像の町内住人による保存活動]

明治期神仏分離により廃寺となった駿河の古刹、建穂寺の仏像を地区で管理し続け、昭和50年には新しく観音堂を建てて保存しています。内部にある60体以上の傷んだ仏像の修理が課題であり、県や市の指定文化財となっている像については徐々に修理を進めていますが、多数を占める新規住民の理解を得ることと、所有者負担金の工面に苦慮している状況。地藏盆に用いている地藏尊修理にクラウドファンディングによる修理費用全額を集める試みを行い、全国から寄付金が集まり、管理者の保存モチベーションは一気に上がり、前向きな展開の模索中です。

[熊谷市平戸「源宗寺大仏（おおぼとけ）」の市民協力による保存活動]

熊谷市は、藤枝市本町にある熊谷山蓮生寺を創建（1195）した熊谷次郎直実（平敦盛を打ち、後に出家し「蓮正」と名乗る）の本貫地。源宗寺は埼玉県で最大の坐像2軀を持つ。檀家はあがるが、宗教法人格のない寺院であり、管理はほぼ個人と護持会によります。極限まで損傷した本堂の再建を目指し、2年前から行政の後押しと市民主体による委員会が結成され、一般から寄付金を集め、令和2年12月より事業を開始し、本堂の解体に先立ち、仮屋への像の移動を完了しています。

仏像というものの、我が国文化における重要な位置付けと、継承についてご理解頂ければ幸いです。

V 関連イベントの報告

ミュージアムコンサート

「ヴァイオリンとピアノのクリスマス・デュオ・コンサート」



クリスマス・デュオ・コンサート

日時 令和2年12月13日(日) 午前11時～正午、
午後2時～3時

会場 文学館講座学習室

出演 村松 京(ヴァイオリン)、岩崎真子(ピアノ)

参加者数 94名

曲目 愛のあいさつ、くるみ割り人形メドレー、ア
ヴェマリア、クリスマスメドレー、ルーマニア民俗
舞曲など、全11曲

「新年のはじめの箏とフルート・コンサート」

日時 令和3年1月11日(月・祝) 11時～、14時～

会場 文学館講座学習室

*コロナ感染拡大に伴う緊急事態宣言発令のため中止

出演 金子昇馬(箏) 佐藤優圭(フルート)

志太の歴史歌劇『井伊の隠し子』第二幕

日時 令和3年1月10日(日)

午前11時～正午、午後2時～3時

会場 博物館エントランスホール

出演 「志太の歴史歌劇創造プロジェクト」

代表 齋藤大輝ほか15名 参加者数 105名



志太の歴史歌劇『井伊の隠し子』

博物館イベント「室町狂言鑑賞会」

日時 令和3年3月28日(日) 午前11時～正午、
午後2時～3時

*コロナ感染拡大に伴う緊急事態宣言発令のため、
当初の1月31日を延期開催

会場 文学館講座学習室

出演 大蔵流狂言師 岡村和彦・小林維毅、岡村春花

参加者数 122名

演目 狂言解説、狂言「伊呂波」、狂言「空腕」



室町狂言鑑賞会

令和2年度 藤枝市郷土博物館企画

駿河の南北朝動乱展

—今川氏、駿河支配のルーツをたどる—

特別展の記録

発行 令和3年6月12日 藤枝市郷土博物館・文学館